

ネヘミヤ記1:1-11 心が苦しい時に (26.4.12)

今日本文の1節によると、ネヘミヤは、「シュシヤンの城にいたとき」と書いてあります。シュシヤンの城という所は、ペルシア帝国のアルタシャスタ王の宮殿の中ですね。ペルシアにいるネヘミヤにある日、ネヘミヤの親族の一人であるハナニから、ユダの状況を聞かされました。しかし、そのお知らせはあまりにも悲しいものでした。3節を一緒にお読みしましょう。

すると、彼らは私に答えた。「あの州の捕囚からのがれて生き残った残りの者たちは、非常な困難の中にあり、またそしりを受けています。そのうえ、エルサレムの城壁はくずされ、その門は火で焼き払われたままです。」

当時、ユダではゼルバベルによって崩れていた神殿は再建されていました。しかし、神殿は再建されましたが、それを守るための城壁は崩れたままでした。そのため、町は無防備な状態で、敵から簡単に攻撃され、人々は大きな苦しみの中にあつたのです。

その話を聞いたネヘミヤは、胸が張り裂けるような思いでした。自分の国の悲惨な状況を聞いても、彼にはどうすることもできなかったからです。同じ場所にいるわけでもなく、ペルシアという異国の地で王の献酌(けんしゃく)官という職に就いていたため、勝手に動くこともできなかったです。

そのような状況の中で、ネヘミヤがとった行動は、神様の前に出て、泣きながら祈ることでした。4節を一緒にお読みしましょう。私はこのことばを聞いたとき、すわって泣き、数日の間、喪に服し、断食して天の神の前に祈って、

皆さん、私たちもネヘミヤと同じような状況に置かれることはたくさんあります。ある問題に対して、私ができることもできない状況です。例えば、子供の問題で親として何もしてあげられない時、あるいは人間関係で行き詰まり、どう振る舞えばよいか分からない時など、私たちはどうしようもできない問題に直面することがあります。

私は今、本当に感謝していることは、セジンとセウンが現地の学校によく通っていることです。とくにセジンが初めて現地の小学校に通い始めた時は本当に大変でした。学校から帰ってくると、ほんの些細なことで泣いたり、怒ったりしていました。韓国では今まで、見たこともなかった彼の姿を見て、私たち夫婦はとても驚きました。日本語を全く話せないし、聞き取れない。そのような状況で、一人で日本の小学生の輪に入っていくことが確かに大変だったと思います。毎朝、車でセジンを送ってあげましたが、車から降りて、緊張しながら一人で校門へと歩いていくセジンの後ろ姿を見るたびに心が辛かったです。父親として私ができることは祈りしかなかったです。

そして、周りの方々にとりなしの祈りをお願いし、それで、皆に祈っていただいたり私たち夫婦も祈ったりしていましたが、主なる神様はその祈りを聞いてくださったのです。だんだん、セジンとセウンが学校の生活に慣れてきて、日本語の上達も驚くほど、早く、大変な時期を乗り越えることができ本当に感謝しています。今は、セジンの友達が家に遊びに来ています、多い時は8人ぐらいでした。本当に感謝しています。

ネヘミヤも同じだったですね。自分の力ではどうすることもできない状況で、彼はその悲しみと苦しさをそのまま抱えて、神様の前に出て祈ったのです。

ネヘミヤの祈りの内容を見ると、彼が「神様がどのようなお方であるか」を深く知っていたことが分かります。5節をご覧ください。言った。「ああ、天の神、主。大いなる、恐るべき神。主を愛し、主の命令を守る者に対しては、契約を守り、いつくしみを賜る方。

神様を愛し、その命令を守る者に神様は、**約束を必ず守り、憐れみを注いでくださる方だと言っています。**つまり、主なる神様は、真実な方であり、憐み深い方です。

また、9節を一緒にお読みしましょう。あなたがたがわたしに立ち返り、わたしの命令を守り行なうなら、たとい、あなたがたのうちの散らされた者が天の果てにいても、わたしはそこから彼らを集め、わたしの名を住ませるためにわたしが選んだ場所に、彼らを連れて来る』と。

私たちが心から悔い改めて、神様に立ち返るなら、必ず回復させてくださる神様であることをネヘミヤはよく知っていました。

主なる神様は今も変わりはないです。私たちに約束された御言葉をそのまま実行し、憐れんでくださるお方です。今も私たちが神様の前に罪を悔い改め、罪を遠ざけて神様に立ち返るなら、神様はいつでも、何度でも私たちを回復させてくださる方であります。なので、私たちは「真実で憐れみ深い神様」の前にいつでも、進み出ることができるのです。

ネヘミヤがそのような状況で、神さまの前に出て祈ることが、実際にはとても大切でした。

聖書を見ると、そのような問題や悲しみの中で、ネヘミヤのように神さまの前に出て泣きながら祈った人たちがいました。それがダビデとハンナです。共通しているのは、自分の力ではどうしたらよいか分からない状況の中で、神さまの前に出て涙を流し、断食し、悔い改め、祈りながら進んでいった人たちだということです。そのような人たちには、結果的に神様が助けてくださり、導いてくださるという恵みが与えられました。その状況の中で神様の働きが現れたのです。ネヘミヤにもそのような神様の恵みと働きが現れますが、それについては少し後で説明します。

しかし、そのような困難や悲しみの中で、神さまを頼らず、祈らず、ただ心配したり、考えているだけで過ごしてしまった人もいました。それが代表的にサムエル記に出てくるエリ祭司です。

エリ祭司の息子であるホフニとピネハスという祭司がいましたが、すでに民の間で悪い話が聞こえてきます。彼らは祭司でありながら、神様が定めたいけにえのささげ方を乱し、いけにえを捧げに来た人々の献げ物を奪い取り、また幕屋で仕えている女性たちにも手を出していました。エリ大祭司は、祭司である息子たちの行いがあまりにもよくない話を聞いて、きっと心配をしていたと思います。

しかし、エリ大祭司が祈ったという記録は聖書で一切ないです。あんなに大きな問題が家族の中で起きているのに、エリ大祭司はただ座っていたり、神殿の入口に立っていたりする姿しか記録がないです。

要するに、彼は「どうしよう、どうしよう」という心配だけして、苦しい思いを抱いて、日々を過ごしていたということですね。その結果どうなったのでしょうか。戦争の中で二人の息子は死んで、その知らせを聞いたエリは椅子に座っていましたが、そのまま後ろに倒れて死んでしまいます。

サムエル記第一、一章と二章を読むと、ハンナとエリ大祭司の姿は対照的に書いてあります。ハンナは子どもを持っていないという悲しみの中で、神殿に行って涙を流しながら祈りました。そして神様はその

祈りに答えて、胎を開いてくださり子どもを与えてくださいました。その子どもは後に大きく用いられるサムエルとなります。同じ辛い状況でも祈りによって生きる人とただ、心配して過ごしていく人とあまりにもさが大きすぎるのです。

ですから、困難で苦しい状況の中で神さまの前に出て祈ることは、むしろ大きな祝福です。そこには神様の慰めがあり、神様がその祈りに時が満ちれば、答えてくださり、良い道へと導いてくださる恵みがあります。

イエス様も十字架を前でゲッセマネの園で心が非常に悲しでいました。マタイによる福音書26章38節にもこうあります。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここを離れないで、わたしと一緒に目を覚ましていなさい。」イエス様も心がとても苦しいときに弟子たちを連れて山に行き、祈りの時間を持たれました。イエス様もそのような状況に十分に祈られたということです。

皆さん、イエス様もそのようにされたのであれば、私たちも心が重く、苦しいときには、神様の前に出て切実に祈るべきです。そのような時、ただ心配してはいけなしいし、我慢してはいけません。我慢していると心が病んでしまいます。神様の前で自分の辛い思い、悩み、心配などをすべてを打ち明けて、助ける求めることがとても大事です。

私たちが、一週間を生きていく中で、心が重く、苦しく、悲しいことがたくさんあるのではないのでしょうか。私自身も本当にたくさんあります。そのたびに、ネヘミヤのように神様に集中できる空間で、祈ります。家にいる時は、早めに起きて、家族が寝ている間、部屋の中で、祈ります。子供たちが遊んでいた部屋なので、ものが散らばっていて全然祈りたくない環境ですが、それでも祈らないことよりは、祈るほうが、何倍もましであることを日々経験しています。

なので、前も話したように、私は、個人的に金曜日の夕方、思いきり賛美し、十分、祈る時間を持ちたいという思いがあります。讚美しながら、祈り、また、讚美しながら、祈り、個人の祈り、家族の祈り、皆さんの祈りを一緒に持ちたい思いがあります。

冬が来る前にやってみたいです。ピアノの伴奏者がいれば、本当にすぐでも始めたいと思っています。それで、一週間、過ごしながら、色々なことで心が苦しい時に、祈りたいなと思った人が金曜日の祈り会に来て、祈りを通して主の癒し、主の力を受ける祈り会をやってみたいです。いつかそれが始まったときには、祈りたい人は、来て一緒に祈ってほしいです。

心に苦しいことや悲しいことがあるなら、神様と集中できる場所で祈ることが、大きな祝福なのです。

では、ネヘミヤがそのように神の前に出て、涙をもって切に祈ったとき、どうなったのでしょうか。

11節を見てください。[ああ、主よ。どうぞ、このしもべの祈りと、あなたの名を喜んで敬うあなたのしもべたちの祈りとに、耳を傾けてください。どうぞ、きょう、このしもべに幸いを見せ、この人の前に、あわれみを受けさせてくださいますように。]そのとき、私は王の献酌官であった]

ネヘミヤは切に祈る中で、一つの決断をしました。それは、アルタシャスタ王に「自分を行かせてほしい」という願いを試みよう、という決断でした。11節には「この人の前に、あわれみを受けさせてくださいますように。」とあります。つまり、ネヘミヤは祈りの中でそのような思いが与えられ、「王に願ってみよう」と決心したのです。

しかし、常識的に考えると、これはとてもあり得ない話です。ネヘミヤは当時ペルシアで献酌官でした。王が酒を飲む前に先に口にして、毒が入っていないかを確認する人です。つまり王の食卓全体を管理する責任者であり、毎日王のそばにいて仕える立場でした。どれほど王の信頼を受けていたとしても、「自分の国が大変なのでしばらく行ってきます」と簡単に言える立場ではないです。

今の時代でも、個人的な事情で長期間休みをくださいと会社に言うのは簡単ではないです。当時はそれ以上に難しく、不可能に近いことでした。

それでも、祈りの中でその思いが与えられたので、ネヘミヤ決断し、信仰をもって勇気を出しました。それで、ネヘミヤ記2章を見ると、実際に王にお願いをします。「王よ、どうか私をエルサレムに行かせてください」と。すると王は「どのぐらいで戻るのか」と尋ねます。そこでネヘミヤはさらにお願いをしまね、7節では通行のための許可書を与えてほしいと願います。8節では城門や城壁のための資材(しざい)を求めます。そこまでも十分お願いしたなと思いますが、さらに8節では、自分が住む家のための木材まで求めています。

ネヘミヤ2:8節を読んでみましょう。また、王に属する御園の番人アサフへの手紙も賜り、宮の城門の梁を置くため、また、あの町の城壁と、私が入る家のために、彼が材木を私に与えるようにしてください。」私の神の恵みの御手が私の上にあったので、王はそれをかなえてくれた。

個人的にここを黙想して「そこまでお願いするの」「ちょっとやりすぎではない」という思いでした。しかし8節の最後に何と書かれているでしょうか。8節の後半部分に「神の恵みの御手が私の上にあったので、王はそれをかなえてくれた。」とあります。

王はこれらすべての願いを受け入れました。誰が助けたのでしょうか。誰が導いたのでしょうか。主なる神様です。その結果、ネヘミヤは実際にエルサレムへ帰還し、城壁を再建することになります。祈りの中で、とんでもない思いが、信仰を持って行ったら、その通りになったのです。

ネヘミヤは祈るだけで終わることもできたはずですが。もしそうだったなら、彼は、神さまが働かれ、導かれ、城壁が再建されたという証は生まれなかったでしょう。しかし、祈りの中で神さまから与えられた思いが、ありえないものだとしても、信仰をもって一歩踏み出したら、大きな証が与えられたのです。どれだけネヘミヤが喜んだのでしょうか。

神様は今でも、祈りの中で、私たちの心に主の思いを与えてくださいます。ピリピ人への手紙2章13節にも書いてあります。「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。」

神様の御心のままに志を立ててくださるのです。それう従うとき、神様ご自身がそれを成し遂げてくださいます。その志とは人間的に考えると時には、不可能に思えるかもしれませんが。「いやいや、それは、無理だろう」と思って何も行動しなければ何も起こらないです。でも、「祈りの中で、はっきりはわかりませんが、主の御旨かなと思ひ、」受け止めて信仰をもって踏み出すとき、神さまが実現してくださるのです。だからこそ、神さまの前に出て祈ることが大切なのです。主の志を、思いを与えてくださるからです。それで信仰を持って行えば、主が今でも生きておられることを体験できるのです。そのような証ができれば、その信仰は生き生きとした信仰になるでしょう。

なので、祈りの中で神さまが与えてくださる思いがあるなら、信仰をもって行動してみましょう。それが人間的には不可能に見えても、神さまから来た思いであるならネヘミヤのように信仰をもって挑戦してみましょう。

「あの人は教会に来ないだろう」と思っても、祈りの中でその人が何度も思い浮かぶなら、もう一度声をかけてみてください。祈りの中で、「なぜか忍耐しなさい」という思いがあるなら、今辛いけれども忍耐してみてください。どうやって神様が導いてくださるのか、わからないのです。神さまの働きは私たちの理性を超えて働かれるので、わかりません。私が札幌に来ているということも、思いもしませんでした。でも、来ているですね。

韓国にイ・ジソンさんという教授がいます。大学時代、授業が終わって兄と一緒に家に帰るために車に乗り、赤信号で止まっていたところ、対向車線から来た飲酒運転の車が車線を越えて衝突し、車が横転しました。車は炎に包まれ、イ・ジソンさんはこのように大やけどを負ってしまいました。何の過ちもないのに、一瞬でそのような姿になってしまったのです。最初は「死にたい」という思いを何度も抱きましたが、不思議なことに教会に行き礼拝を捧げるたびに、「あなたを用いる」という思いが与えられました。彼女はそれを信じました。もちろん、弱くなったり、辛かったりすることがたくさんありましたが、彼女は、最後まで主だけを見つめながら一日一日を生きるようになり、神さまはイ・ジソンさんを通して多くの人を慰めるようにされ、彼女が通っていた大学の教授としても立て上げ、非常に尊く用いてくださっています。

先週、妻と一緒に札幌大学の近くに行ってみました。お昼の時間になると、多くの大学生が外に出てきていて、とても驚きました。雪を出して、声をかけて、教会で言語の交流などを行っているけれど興味があるかと聞いてみました。中国の方やモンゴルの方にも出会い、旭川から来て一人で生活している学生の話も聞くことができました。実際に会って話すことで、留学生の状況なども知ることができました。

改めて気づかされました。教会の周りには、小学生や大学生など若い人たちがたくさんいるということです。そしてわが教会のために祈るたびに、「ここにとどまっていなくて、実際に会いに行きなさい」という思いが与えられているように感じました。だから私は決心しました。まずは会ってみよう、声をかけてみよう。今できることはそれくらいなので、冬が来る前に福音の種を蒔いていきたいと思っています。

ネヘミヤは、崩れた城壁のことで心を痛め、神さまの前に出て祈りました。私たちにとって、今崩れている領域があるとしたら何でしょうか。何によって心を痛め、苦しんでいるのでしょうか。そのとき、ネヘミヤのように、真実であわれみ深い神さまにより頼み、祈ってみるのはいかがでしょうか。神様は今も、神さまにより頼んで願い求める者を助け、恵みを与え、良い道へと導いてくださる方です。そしてその心に、御言葉や主の思いを与えてくださいます。もし、祈るたびに、礼拝を捧げるたびに、ある思いがずっと心から消えないなら、たとえそれが、無理そうなことでも、神さまを信頼し、信仰をもって一歩、歩んでいくのはいかがでしょうか。主がその信仰の歩みの上にともなってください、導いてくださることを信じます。